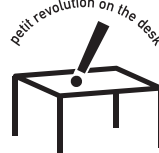


Vol.24

机の上の小さな変革



目の置きどころ

こんにちは、菅俊一です。みなさんも、家で過ごす時間がかなり増えているのではないかと思います。今回は「見慣れた環境を、いつもと違った視点でもう一度新しく見てみる」というテーマで進めてみたいと思います。いつもと違った視点といっても、注意や意識を変えるということではありません。物理的に目の位置を変えることによって、強引に視界に変化を起こしてしまうということが目的です。

◇ ◇ ◇

それでは、早速やってみましょう。まずはみなさん、その場でしゃがんで周囲を見回してみてください。可能でしたらそのまま数歩、前後に移動もしてみてください。いかがですか？ 身長1メートルの視界からは、いつも見ているテーブルの上の物は見えませんが、普段見ることができないテーブルの下に広がっている世界を覗くことができます。同様に、椅子の上に乗って高い位置から周囲を見回してみるとどうでしょう。自分の目の高さが変わると見渡せる領域が広がり、いつもは見上げていた棚を上から眺められるなど、こちらも違う世界を見ることができます。

そのまま次は、みなさん自身のスマートフォンを利用して、たとえば、下から見上げたドアノブや、真正面から見たエアコンといったように、普段目で見ているのとは違う角度から身の回りの物の写真を撮ってくださ

い。実際に体を動かしても見るできないアングルでも、スマートフォンのカメラを持つ手を高く掲げて撮ったり、隙間に差し込んで撮ったりするなど、私たちはカメラという道具を使うことで、目の位置を強引に変えて、身体の制約を超えた位置から姿を捉えることができます。

—— 想像ではなく実際に経験する ——

このように、私たちは強引に目の位置を変えてみることで、自分とはまったく異なる身体を持つ人の視界を手に入れることができます。

よく「相手の立場に立って考えてみましょう」と言われることがありますが、実際にどうすればできるのかは、これまであまり説明されてこなかったと思います。今回みなさんに取り組んでいただいた方法は、そのヒントになるかもしれません。まず強引に目の位置を変えてしまうことで、自分とは違う視界を手に入れてみる。見える物事が変われば、得られる情報が変わり、得られる情報が変われば、解釈や判断の仕方が変わります。

誰かの目線が想像できなければ、強引に誰かの目線の位置に移動してみる。たったそれだけのことで、自分が当たり前だと思っていたことは、別の人にとっては当たり前ではないということが実感できます。

想像するのではなく実際に経験することによって、私たちは考えを広げ、深めることができます。 ▲

PROFILE 菅 俊一 〈SYUNICHI SUGE〉

コグニティブ・デザイナー。表現研究者。映像作家。多摩美術大学美術学部統合デザイン学科専任講師。1980年東京都生まれ。人間の知覚能力に基づく新しい表現を研究・開発し、様々なメディアを用いて社会に提案している。主な仕事・著書に、NHK Eテレ『2355/0655』、『観察の練習』『ヘンテコノミクス』など。